

小沢環境大臣との会談

執筆／レーナ・リンデル 持続可能なスウェーデン協会 日本代表

4月2日（金）、スウェーデンの自然学校代表団は帰国する前の日に小沢環境大臣に会う機会をもちました。通訳を入れて30分だけのミーティングでしたが、日本を旅行して経験したことなどを話題にするミーティングでしたのでその様子を伝えたいと思います。

実は環境大臣に合えるという話が一週間前にあがった時から、大臣に何を伝えたいか、どうやって伝えるかの打ち合わせを重ねていました。東京のピザ屋さん、北海道に向かう電車の中、北海道の温泉で和風の朝食を食べながら、などなどの場面でその打ち合わせが続きました。ですから当日にはとてもよく準備ができていました。

参加者：自然学校の先生4人（ミアさん、イレーンさん、マッツさん、ローベルトさん）、バルブ
ロさん（持続可能なスウェーデン協会）、レーナ（持続可能なスウェーデン協会、通訳）、
佐々木晃子（大臣面談コーディネーター）。

首相への手紙：自然学校の先生の皆さんは首相に渡してもらいたい手紙を用意していました。ス
ウェーデン自然学校協会を代表して4人で署名した手紙で、小沢環境大臣に渡せば首相
に渡してもらえらるだろうと考えました。

大臣室に入る前に秘書の方からの説明がありました。ミーティングの冒頭で日本の主要メディア2社の記者が参加し撮影するので大臣に渡すものがあれば最初に渡すとよいというアドバイスがありました。大臣室に入るとまずは挨拶をして席のところまで行きました。そこですぐにミアさんが用意していた手紙を渡し、首相に渡すよう、お願いしました。手紙は公開のものでだれでも読める手紙だということも補足しました。その後メディアは退室し、皆が席について、対談が始まりました。

小沢大臣はまず、私たちが最初に訪問した山梨県の出身だと紹介してくれました。訪問したキープ協会が位置する清里から少し離れたところ（甲府）ですが、山梨は日本の有名な山、八ヶ岳、富士山、南アルプスが三つほど見える珍しいところだと説明してくれました。（清里に行った日は晴れで富士さんを含めて山々がとても美しく見えました。）

佐々木さんが日本の旅行先などを簡単に説明してからミアさんが皆を代表して、2週間の経験とその結果考えたことを大臣に話しました。ミアさんはよく準備をしていて、メモを少し頼りにしながら冷静かつ親切に話しました。ローベルトさんがミアさんの補佐として、皆で用意した写真をコンピューターの画面で大臣に見せました。



最初の写真はスウェーデン南部にある国立公園の写真でした。Skaralid(スケーラリード)というところで、日本の景色を見ながらローベルトさんが思い出したところです。森に覆われた急斜面に囲まれた谷で、湿地や沼があります。その場所はスウェーデンの最初の自然学校が始まったところで、当時は環境保護庁の施設を使っていました。現在、この谷は国立公園になっています。大臣は最初その写真を日本の景色だと思ったようですが、それはスウェーデンの景色だと確認しました。



次に、スケーラリードと景色が似ている北川湿地の写真を見せました。「ここはスウェーデンと同じように、大人も子供も参加できる環境教育を行う場所として適しているのですが、これからなくなるということを知って、とても心配しています。というのはこの谷底は土砂で埋め立てられる予定になっているそうです。」とミアさんは説明しました。そして北川湿地の土砂搬入路を作っているブルドーザーの写真も見せました。大臣はスタッフにこの北川湿地のことを知っているかどうかを確認しました。知っているとうなずくスタッフがいました。大臣はローベルトさんが写真を見せ始める時にスタッフに声をかけてかれらも大臣の後ろから写真を見れるようにしてくれました。

次に、日本では子どもたちにお米の栽培について教えていると知ったことを話しました。スウェーデンは子どもたちによくジャガイモの栽培を教えているのでその写真一枚を見せました。「このように文化や歴史のことを学ぶことがで

きる場所は、都会の近くにあることが大事です。名古屋の近くでそういう場所の一つを見つけました。使わなくなった水田や池が残る場所です。その平針の里山は今開発される予定になっているそうです」と説明して使われなくなった平針の水田の写真を見せました。



「子供が小さい時、楽しみや喜びのあるかたちで自然と触れ合うことができると自然とのよい関係ができます。よい関係ができると、子供はよい関係の相手の自然を大切にしたい気持ちになります。これは持続可能な開発のための教育の基本です」と続けました。

ミアさんは最後に、大臣にお会いでき、それが2週間の旅行のとてもよい終わりになると感謝の気持ちを伝え締めくくりました。大臣はそこで「終わりよければすべてよし」という日本のことわざを紹介してくれました。

そのほかの大臣からのコメントや質問は、「日本の環境教育は不十分ですが、現在は環境教育法の改正を準備しています」、「スウェーデンは、『環境』は科目ですか」。

これに対するミアさんの答えは「科目ではありません。スウェーデンの学習指導要領では、持続可能な開発の視点はすべての科目に盛り込む必要があると書いてあります。たとえば経済や健康にも関係します。」

大臣はまた、持続可能な発展の概念は日本社会であまり普及していないこと、それに対して気候変動に対する意識は普及していることを説明しました。大臣はCOP10を機会に生物多様性の理解が気候問題の理解と同じぐらい普及することを期待しているそうです。

次に佐々木さんが事前に送ってあった質問を話題として取り上げ、その1番に答えてもらいました。「大臣にとって貴重な自然はどこか」という質問でした。小沢大臣が取り上げたのは東京南部にある多摩川のことでした。そこに住んで二人の子供を育てたので子どもと一緒に自転車に乗って河原を走ったことなどが大切な思い出だそうです。

そこでイレーンさんは質問の背景を説明しました：「子どもの時に自然と関わり、自然が好きになることが環境意識の始まりです。そのため、学校や、子どもが住んでいるところの近くに自然があることが大事です。」

小沢大臣は一度だけスウェーデンに行ったことがあるそうで、ストックホルム市内から少しだけ慣れるとすぐに森や湖があり、そのような環境はうらやましく思うと話しました。私たちは北海道にも行ったと大臣が聞いて、「日本には人口密度の高い大都会と全然違う場所もあると見てもらってよかった」とコメントして日本とスウェーデンの国土と人口の違いが少し話題になりました。

その後大臣は COP10 の二つの主な目的を紹介してくれました。

- 1) 2010 年以降の生物多様性保全の目標を採択すること
- 2) 遺伝子資源の扱い方に関する合意に達成すること (ABS =Access and Benefit Sharing)

また日本の「SATOYAMA イニシアティブ」も紹介してくれました。人と自然が共生するという概念です。

そこでローベルトさんが北川湿地を土砂で埋めようとする鉄道会社（京浜急行電鉄）のことを取り上げ、COP10 はその会社にとっての PR チャンスだと指摘しました。京急が北川湿地を土砂で埋める代わりに環境教育の拠点として保全し活用すれば、皆がそこに行くために使う電車を「みどりの電車」と呼んで PR ができるだろうと提案しました。

大臣は、日本が今まで開発を中心の社会作りをしてきたが、より自然保護を重視したり、環境保護とのバランスをとったりする社会作りに切り替えたいという自身の考えを伝えました。

時間が終わりそうになったのでイレーンさんは最後に大臣に大きめの虫眼鏡をプレゼントしました。ガラス面が少し霞んでいることに気付いたのでスカーフできれいに拭くと皆がひと笑い。渡す前に歴史のことを話しました。

約 250 年前、スウェーデンの植物学者カール・フォン・リンネの弟子、カール・ペーテル・テュンベリが日本にやってきました。目的は植物など日本の生き物を観察することでした。「私たち自然学校の教員はテュンベリと似たような形で来ました」と言ってリンネが自身の教育活動でよく言っていたことを紹介しました：「世の中の大きなことと複雑な関係を理解するために小さいものをよく観察する必要がある」。

大臣は喜んで虫眼鏡を受けとって、「最近は何年をとったので字を読むためにも必要になるかもしれない」と冗談を言ってくれました。皆が大きく笑って、ミーティングが終わりました。最後に集合写真をとって、秘書からたくさんの英文資料と、COP10 に向けての PR グッズを全員分もらいました。

関連資料と写真は以下のホームページにアップしています。

<http://www.netjoy.ne.jp/~lena/ssa.html>

スウェーデンの皆さんは日本の自然保護状況について厳しいコメントをしていますが、2週間ほど旅行して日本のいいところをいっぱい見て、日本文化のいろいろを体験して、たくさんの人々と出会って、日本がとても好きになって帰国したと確信しています。

Lena

<参考リンク>

Skaralid(スケーラリード)を含むスウェーデンの国立公園

<http://www.nationalpark-soderasen.lst.se/eng/eindex2.html>